大崎農業改良普及センターだより

Osaki

Vol.162

2025年2月21日

Pick Up!

JA古川大豆・麦生産組織連絡協議会の鈴木会長に聞いてみた

次世代に繋ぎたい

『本州最大の大豆産地』としての誇り

令和６年度プロジェクト課題活動報告

農地整備を契機とした地域営農体制の構築【Ｒ５～Ｒ６】

地域農業の維持・発展に向けて法人化を目指している色麻町清水集落営農組合に対して、将来ビジョンの作成や営農体制構築、高収益作物の導入を支援しました。

まず、法人設立に向けた検討に参加を希望する集落の若手や女性を含めた農業者等で構成された「清水地区法人化検討会」や「リーダー会議」を開催し、法人形態や生産体制、設立目的等についてワークショップも交えて検討しました。また、法人形態や運営に関する研修会、高収益作物導入に向けた視察研修を開催しました。

これらの活動により、目指すべき法人像が明らかになり、令和７年２月に発起人会を立ち上げ、今秋には法人設立を目指すことになりました。また、高収益作物についても、さつまいもとたまねぎの試験栽培に取り組むことになり、新たな地域営農の確立が期待されます。

高収益作物に取り組む法人への視察研修

加美地域におけるさつまいもの新たな産地形成に向けた生産技術の確立【Ｒ６～Ｒ７】

全国的にさつまいも需要が高まる中、ＪＡ加美よつばでは、新たな産地形成に向け、新規作付けの拡大を推進しています。しかし、寒冷地に位置する加美地域において、温暖な気候での栽培が適するさつまいもを安定的に生産するためには、加美地域に合わせた栽培技術の体系化が不可欠です。

普及センターではＪＡと協力し、新規作付け者に対して、土壌分析による肥培管理支援のほか、地域で先進的にさつまいも栽培に取り組んできた㈲ライスアーティストを講師に迎えて定植や収穫作業の講習会を開催し、栽培技術習得の支援を行いました。来年度は、今作での課題を整理し、より安定した生産の実現に向けた支援を行っていきます。

さつまいも定植講習会

中山間地農業の核となる農産物直売所の組織運営能力向上【Ｒ５～Ｒ７】

普及センターでは、令和５年度から薬莱山にある農産物直売所「やくらい土産センター・山の幸センター」の栽培技術や経営力向上のための支援を行っています。

今年度は、野菜栽培の土づくりや高温対策に関する技術向上のための研修会や、経営の現状と今後の課題について考える研修会、商品をより魅力的に見せるための売り場改善に関する専門家派遣、若手生産者によるイベント開催支援などを行いました。

今後も加美町と共により魅力的な直売所づくりに向けた支援を行っていきます。

野菜栽培の高温対策に関する研修会

子実用とうもろこしを含む水田農業の輪作技術体系の確立【Ｒ５～Ｒ６】

令和６年度は、春先の乾燥や夏の酷暑、９月の長雨などの天候不順に見舞われましたが、砕土率や苗立ちの確保、堆肥の投入による地力向上に努めたことにより、子実用とうもろこしの収量は、目標の700kg/10ａを確保することができました。

また、子実用とうもろこし後の大豆作では、大豆連作ほ場に比べて生育量や莢数が上回り、坪刈収量は連作よりも10％多い260kg/10ａとなり、子実用とうもろこしを輪作体系に組み入れると大豆の増収につながることが確認されました。

水稲の乾田直播技術については、渇水等により初期生育の確保に不安があったものの、収量は平均で600kg/10ａを確保することができ、農業者も乾田直播の導入に手ごたえを感じたようでした。

ＪＡ古川等の関係機関と緊密に連携した結果、子実用とうもろこしを導入した大豆、水稲との輪作体系の確立に向けた大きな成果となり、さらなる取組が期待されています。

子実用とうもろこし収穫実演会で調査結果を説明

労務管理に対する経営セミナーを開催しました！

管内の農業法人等を対象に労務管理に関する知識の習得を目的に、令和６年12月９日に「令和６年度農業法人等の労務管理研修会」を開催しました。

講師に、社会保険労務士の鈴木大輔様を招き、雇用に当たっての募集方法や契約、雇用者責任等について分かりやすく講義いただきました。

国の生産年齢人口予測等によると、2042年頃までに1,203万人が減少することが予測されており、雇用による担い手の確保が今後一層重要となることから、普及センターでは、引き続き雇用技術のスキルアップを支援していきます。

労務管理研修会～今からでも間に合う雇用管理～

地域計画策定が進んでいます！

地域計画（地域農業経営基盤強化促進計画）は、令和７年３月末までに策定することとなっており、協議の場の開催を通して地域の農業者の意見を聞きながら、各市町村で計画づくりが進められています。

北部地方振興事務所では、去る１月17日、地域計画策定推進のため、管内関係機関を参集し情報交換会を開催しました。令和６年４月に16地区の地域計画を公告した岩手県花巻市の地域計画策定担当職員の方をお招きし、地域の話し合いの継続の重要性や関係機関の体制整備について学ぶとともに、策定後を見据えた意見交換等を行いました。

今後も、各市町における地域計画実現に向け、継続的な支援を行っていきます。

１月17日開催情報交換会

Pick Up!

～普及センター所長がＪＡ古川大豆・麦生産組織連絡協議会の鈴木会長に聞いてみた～

次世代に繋ぎたい『本州最大の大豆産地』としての誇り

今回は、第52回全国豆類経営改善共励会（ＪＡ全中・ＪＡ新聞連主催）大豆集団の部で農林水産省農産局長賞を受賞された「富長生産組合」の代表であり、古川農協大豆・麦生産組織連絡協議会の会長でもある鈴木正一さんにお話を伺いました。

所　　長：このたびはおめでとうございます。

鈴木代表：ありがとうございます。各方面からお祝いの言葉をいただき感謝しています。

所　　長：今回受賞の実績を見ると、大豆の反収は３ヶ年平均で226kgと県平均167kgを大きく上回っています。これまでどのような取組を行ってきたのでしょうか？

鈴木代表：30年前に大豆を始めたころは反収120kg程でしたが、視察研修に行くなど、収量向上のために様々な取組を行ってきました。

所　　長：ＪＡ古川では毎年大豆の共励会を行っておりますが、これも生産者が積極的になるきっかけでは？今回の受賞もＪＡと生産組織が一体となり取り組んだ成果でしょうね。

鈴木代表：そうですよね。共励会は生産組織の張り合いになっています。私も協議会の３代目会長として、先輩方に「本州最大の大豆産地なんだから頼むよ！」と激励されたこともあり、80組織のほ場を日々巡回しています。

所　　長：新たな試みとして子実用とうもろこしを加えた３年３作の輪作体系にも取り組まれています。この点も評価された様ですね。今後の展望をお聞かせいただけますか？

鈴木代表：子実用とうもろこしは今年で３年目となり、反収１トンを超える生産組織も出てきました。今後も子実用とうもろこしを拡大させ、畜産農家への供給を増やしたいです。また、新たに３年４作体系として小麦にも取り組んでおり、生育は順調です。若い担い手が「自分もやってみたい！」と思えるような農業の実現を目指しています。

受賞おめでとうございます！

令和６年度宮城県農林産物品評会及び宮城県花き品評会における管内の受賞者を紹介します。

●宮城県農林産物品評会（うるち玄米部門）

８席　色麻町　阿部貞雄さん（つや姫）

●宮城県花き品評会

金賞　大崎市岩出山　佐藤慎也さん
（スプレーギク「マグナ」）

銀賞　大崎市三本木　小髙和泉さん
（スプレーギク「セイオペラピンク」）

みどり認定を受けましょう！

環境にやさしい農業に取組む生産者を応援します。

認定を受けるメリット

- 農林水産省の補助事業の採択で優遇
- 設備投資時の所得税・法人税の優遇
- 日本政策金融公庫の無利子融資等

←詳しくは宮城県ＨＰ

お問合わせ先
農業振興部農業振興班
電話：0229-91-0717

発行　宮城県大崎農業改良普及センター　〒989-6117 大崎市古川旭四丁目１-１
電話（0229）91-0727（地域農業班）　FAX（0229）23-0910
（0229）91-0726（先進技術班）
ＨＰ https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/
普及センターHPはこちらから→

R80 古紙配合率80% 白色度70%再生紙を使用しています。
VEGETABLE OIL INK
この普及センターだよりは一部69.30円で700部作成しました。